

# 平成23年度 矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長 川上 公一

<b>本校のミッション</b>
今日より輝く明日のために  ・目的をもって登校できる ・確かな学力を身につける

学級数	13	学級	児童(生徒・園児)数	353	人
職員数	28	人	家庭数	318	戸
学校関係者評価委員	榑崎 裕志 (矢掛町人権擁護委員・元校長) 有岡 達生 (県立矢掛高等学校) 平尾 正一 (矢掛中学校PTA) 山部 隆 (備中西商工会) 江口美由紀 (矢掛中学校スクールコーディネーター) 岩崎 恭子 (矢掛中学校スクールサポーター) 諏訪 英広 (川崎医療福祉大学)				
専門評価委員	高木 亮 (中国学園大学)				

A 成果をあげている B ほぼ成果をあげている C あまり成果をあげていない D 成果をあげていない

領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	確かな学力	・学力向上を目指した授業改善を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教科の授業で、電子黒板等のICTを活用する。</li> <li>各教科の授業で、自分の考えをまとめ表現する場面を設定する。</li> <li>小中高の学校間の連携を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICT(電子黒板)を効果的に活用しようとした教員が75%以上いる。</li> <li>46%(昨年の割合)以上の生徒が、授業中に自分の考えを発表している。</li> <li>小中高連携の活動を年6回以上設けている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート調査ではICTを効果的に活用した教員は100%であり、自作教材・デジタル教科書・提示装置などを組み合わせて、何らかの形でICTを活用している。</li> <li>生徒に対するアンケートでは「授業で自分の意見や考えを伝える場面がある。」という項目では79%の生徒が「そう思う・どちらか」という回答をしている。</li> <li>小学校とは「6年生を招いて合同授業」「指導教諭の小学校公開授業に参加」「陸上記録会の手伝いに中学生のボランティア参加」など、高校とは「映画上映会への参加」「大名行列の清掃ボランティア」「エコキャップのリサイクル」「高校の授業参観」など、全体では「学力・人間力研究会」の取り組みなど、小中高連携の活動を6回以上行った。</li> <li>「教えて考える授業」の取組について小中の共通理解が図られた。</li> <li>○いずれも達成基準を超えており、教員の授業改善の意識も高いと思われる。</li> </ul>	A
2	確かな学力	・家庭学習の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭学習の方法や必要性を伝える。</li> <li>わくわくホリデースクールの参加を促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>75%(昨年の割合)以上の生徒が、丁寧に課題に取り組んでいる。</li> <li>50人以上の生徒がわくわくホリデースクールに参加している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒に対するアンケートでは、「宿題は家で取り組んでいる」との回答は76%であった。保護者の回答もほぼ同じで、実情が正直に回答されていると考えられる。</li> <li>計141人の生徒がわくわくホリデースクールに参加した。</li> <li>○「学習のびき」を全生徒に配布し、各授業で活用したり、定期テストごとに家庭学習の見直しと学習計画を立てる活動を実施していることで、家庭学習の充実につながっていると考えられる。</li> <li>○達成基準以上の生徒が参加し、参加後多くの生徒が来年も参加したいと答えており充実した時間が過ごせたようである。</li> </ul>	B
3	支え合う生徒	・支え合い、認め合う集団を育て、社会的実践力が身につくようにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>QUアンケートの分析、結果を元に、学級経営の充実を図る。</li> <li>生徒の自己肯定感を高める活動を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5月のアンケート結果よりも学級に満足している生徒が増えている。</li> <li>生徒の自己肯定感を高める活動を3回以上行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>QUアンケート結果によれば学校生活満足度群(全国平均35%)に属する生徒の割合は64%から70%になり、5月より6%増加した。進級によるクラス替えで、前年度最終調査より今年度5月の調査ではマイナス傾向であったが、最終調査では前述の通り。また、学級生活不満足群(全国平均33%)に属する生徒の割合は12%から7%になり5%減少した。</li> <li>生徒に対するアンケートでは、「学校で相談できる友達がいる。」との回答は90%、「学級で当番活動や係活動に責任をもって取り組んでいる。」との回答は92%であった。</li> <li>「我武者羅応援団」の来校をきっかけにして、応援団が結成され、3年生の有志が地域に出てパフォーマンスを行うなど活躍の場を広げた。また、11月には外部講師を招き、「自分の可能性に気付く」等についての講演会を予定している。</li> <li>○アンケート結果をみると、否定的な回答も少数ではあるが数字として現れている。しかし、アンケートを実施することにより学級内の課題が分かり、その結果を今後の学級経営に生かせることを考える。</li> </ul>	A
4	支え合う生徒	・社会的実践力が身につくようにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒会や専門委員会の活動と連携して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>83%(昨年度の割合)以上の生徒が、矢掛中学校三つの誇りの「掃除」を意識して実践しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒に対するアンケートでは、矢掛中学校三つの誇りの「掃除」は90%、「あいさつ」は93%、「時間を守る」は92%の生徒が実践できていると回答している。また、「生徒会・委員会活動等に積極的に協力している」と回答している生徒は72%であった。</li> <li>○昨年度に比べて「掃除」は7ポイント、「あいさつ」は3ポイント、「時間を守る」は4ポイント、それぞれ上昇している。今後、生徒会・委員会活動と効果的に連携しながら、矢掛中学校三つの誇りに対して、高いレベルで意識と実践力を維持していくことが必要だと考える。</li> </ul>	B
5	生徒の支援	・学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>不登校解消に向けて教員研修を行う。</li> <li>スクールカウンセラーや外部機関との連携を図り、個別のケース会議を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インシデント・プロセスによるケース会議を3回以上開いている。</li> <li>不登校生徒が昨年度より減少している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インシデント・プロセス法によるケース会議の持ち方について研修した。実際にこの方法に基づいて3回以上ケース会議を持った。</li> <li>必要に応じてケース会議を行い、組織的な支援を行った。不登校生徒のうち3名が学校に、6名が町の適応指導教室に登校できるようになった(内2名は重複)。関係諸機関との連携やスクールカウンセラーによる保護者・生徒のカウンセリング、登校・通所時の支援員の協力が効果があった。</li> <li>生徒と保護者に対するアンケートによれば、「困ったことは先生(学校)に相談しやすい」と回答した生徒が66%、保護者が64%であった。また「安心して学校生活が送れている」と回答した生徒は92%であった。</li> <li>不登校生徒は、昨年度より減少しており、1・3年では全国平均を下回っている。適応指導教室に通級できるようになった生徒が増えた。</li> <li>○一定の成果は表れているが、別室登校生徒に対する支援の在り方が課題である。</li> </ul>	B
6	生徒の支援	・特別支援教育の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学級担任と関係する教員等が、連携して指導・支援にあたる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>安心して充実した学校生活を送っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度より、落ち着いて学校生活を送れるようになった。</li> <li>交流の授業に参加できる時間が増え、集中できる時間が伸びている。</li> <li>3年生は特別支援学校進学に向けて、学校説明会に保護者と共に参加した。</li> <li>○学級担任と関係する教員、支援員の情報交換を通して連携が密になり、個々の生徒の支援が充実してきている。</li> </ul>	A

## 分析・改善方策

○ICT活用のために全教室に電子黒板・教材提示装置が導入され、使い勝手がよいことが活用のしやすさにつながり、ほとんどの教員がICTを活用したと思われる。また、総合的な学習では生徒がプレゼンテーションソフトで作った発表会の資料を使ってリハーサルするなど、生徒が扱う時間も増えた。今後は蓄積したノウハウを教員相互でいかに共有できるかを検討したい。

○わくわくホリデースクールには予想の3倍近い生徒が参加し、90%以上の生徒が来年も参加したいと肯定的に回答した。「みんなと一緒に学習すると落ち着けて、はかどった」「春休みも実施してほしい」などの意見があった。人数も多かったため、よい環境で学習できる雰囲気と仲間意識がやる気を高めたのではないだろうか。ただ、この効果がどのように現れているかが今後の課題である。

○定期的に実施しているQUアンケートは、生徒の学級での満足度尺度として客観的な資料となり、学級経営充実に向けての一助となっているので、今後とも継続して取り組みたい。また「我武者羅応援団」の講演がきっかけとなり、生徒の地域活動へと広がりを見せたことは評価に値すると考える。次年度も自己肯定感を高める取り組みを企画したい。

○生徒会や各委員会が「矢中三つの誇り」に関連した取り組みを推進し、あいさつ・時間・清掃への意識の向上を更に図るとともに、生徒会・委員会活動等に積極的に参加・協力する実践力も伸ばしていきたい。

○学校に適応しにくい生徒への支援は、個別・具体的な支援をスクールカウンセラーや外部機関との連携を図り、関係機関との連携することで一定の成果を上げることができている。今後は保護者や生徒との信頼関係を構築していくことが求められる。また、家庭の問題が影を落としている場合や発達障害傾向の場合があり、関係諸機関との連携が一層必要になっている。

## 学校関係者評価

1. 確かな学力

- ICT(電子黒板等)の活用によって生徒の集中力が上がり、教職員だけでなく生徒も自ら操作し積極的に授業に参加できており、学力向上に向けての取り組みとして大いに期待ができる。ICTを使うことを目的化することのないよう、教師は基本的な授業力を核として、生徒一人ひとりと向き合う授業を大切にしたい。
- 「学力」をどう捉え、「何をどのレベルまで」目指しているかを可能な限り明確にした上で、具体的計画や達成基準を設定してほしい。また、教師はそれらを生徒や保護者に明確に伝え、指導することが必要ではないだろうか。
- 家庭学習の取り組みはできてきているが、例えば、宿題について、可能な限り個に応じた出し方を工夫してほしい。また、保護者においては、家庭学習に関心をもち、子どもに適切な声かけをしてほしい。

2. 支え合う生徒

- 生徒により差があるものの、社会的実践力は、全体的に少しずつ身につけている様子が見えてくる。また、教師の「仕掛け」「フォロー」「思い」を基盤として、「生徒同士の磨き合いの場」「同じ目標に向かって全員で取り組む達成体験」「意見の違いをぶつけ合い、本音を出し合える集団」「競争することにより、お互いが高め合える集団」を大切にしたい。
- 「我武者羅応援団」の活動は一つの大きなきっかけ、何か心に残ったのではないと思う。PTAがその企画に関わったことも大きい。今後も、人と人のつながりや言葉(敬語など)を大切に生徒を育成してほしい。
- 自己評価にあたっては、アンケート(数値)結果だけでなく、日々の観察等を踏まえたものであってほしい。また、QUアンケートの結果、満足度群の割合が高くなったことは喜ばしいが、希少意見の不満足な部分について、生徒の声(記述)も大切にしたい。

3. 生徒の支援

- 特別支援学級の担任と関係する教員が密に情報交換をし、それぞれの生徒に対する支援が充実しており、生徒の成長につながっている。
- 不登校・別室学習の生徒に対する個別・具体的な支援をスクールカウンセラーや外部機関と連携して実施している。短期解決は難しいだろうが、対象生徒のみならず保護者に対する働きかけも課題解決にとっては大切なポイントであろう。さらに、不登校の兆しを早期にキャッチし、予防策を講じてほしい。

4. 総論

- 家庭学習の充実、ICTの効果的活用、不登校対策など、学校(教員)は非常に熱心に誠実にその実践に取り組んでいる。来年度も継続して真摯な取り組みを展開してもらいたい。
- 教員は校長のリーダーシップのもと非常によく頑張っており、工夫し、それぞれの人が自分の立場、役割を認識し、実践している。
- 学校の努力により良い方向を維持できている。ただし、地域性もあるかもしれないが、学校に対する関心が必ずしも高くなく、学校との関わりをあまり持とうとしない保護者がいづらくなるように思われる。より良い学校づくりのためには保護者の主体的・積極的な参加が必要であろう。例えば、PTAとの連携・協力のもと、授業参観や懇談会の工夫が必要ではないだろうか。
- 学校評価書は、本校のミッションをはじめ、全体的にもう少し具体的な記述にしたほうがよいのではないだろうか。

5. 設置者などへの要望

- 集中して学習できる環境作りの一環として、エアコンの設置をお願いしたい。
- 新しいことへの取り組み、職員の資質向上のための研修を次々と提案することは素晴らしいと思いますが、それが真に教員の力となっているか、定着しているかの把握をきちんとすることも大切にしてほしい。”自信を持って教えることができる教員、矢掛中に勤めてよかったと思える教員を”
- 保護者は教育委員会の方針をほとんど理解していないのではないだろうか。保護者が意見を出し対話する機会や場をもっと設定してほしい。
- 教育は人作りと考える。どんな生徒をつくるか。そのためにどんな取組をしたか。その結果、何がどこまで出来たか、出来なかったか。また、その原因は何か。これらを、しっかりと検証し、修正を加えつつ、より良いものにしていく取組を評価し支援していただきたい。パフォーマンスのやりっぱなしでは子供は育たないと思われる。
- 校舎内の老朽部分について引き続き検討の上、改修にあたってほしい。